

## 台湾伝道庁の設置とその背景

戦前の台湾における天理教を考えるために、台湾伝道庁の設置について述べておきたい。

台湾伝道庁の設置は1934（昭和9）年8月26日、本部月次祭後の本部員会議にて決議された。台北市東門町160に仮庁舎を置き、福岡教務支庁長の佐治正嗣が庁長に就任した。なぜ福岡教務支庁かと言えば、それまで台湾が福岡教務支庁の所管となっていたためである。佐治の前任者である松村義孝が福岡教務支庁長を務めていたときから、すでに教務支庁内に台湾伝道庁の前身にあたる組織があったために、形としては松村を初代庁長とし、佐治を2代庁長とすることになった。またこのとき、畑林為喜が書記に就任した。

1936（昭和11）年2月、書記を務めていた畑林為喜が3代庁長に就任した。同年12月26日に、「お目標<sup>めど</sup>」が下付され、台北市御成町15番に新しい伝道庁が建設されることとなった。翌年1月9日に2代真柱が渡台し、新築落成につき鎮座祭が執行され、翌日には奉告祭が執行された。3月には畑林に代わって紺谷金彦が4代庁長に、橋本武が書記にそれぞれ就任した。1939（昭和14）年に台湾伝道庁管内に華南出張所が設けられ、橋本武が所長に就任した。また三濱善一が伝道庁主事長に就任した。翌年、華南出張所は伝道庁に昇格した。

1939（昭和14）年に5代庁長として上原繁雄が就任し、3年後には前回（11月号）紹介した天理教校台湾講習所が上原庁長を校長として開設されるなど、ようやく発展の様相を示すようになったころ、日中戦争のため戦時体制が強化されるようになり、自由な布教活動が難しい状況になっていった。1944（昭和19）年には三浦清太郎が6代庁長に就任したものの、就任後1年余りで日本は敗戦し、日本人は内地への引き揚げを余儀なくされた。そして、伝道庁は日産（日本人の財産）として、戦後台湾を統治することとなった国民党政権によって接收された。

以上が、戦前の台湾における伝道庁の設置とその後の流れについて簡単にまとめたものである。台湾は日清戦争の講和条約である下関条約によって日本の領土として割譲され、1895（明治28）年から日本の統治下になった。その後、これまで紹介してきたように防府支教会（現在の防府大教会）の古谷マツが単身で1896（明治29）年に台北に渡り布教を進め、1903（明治36）年に台府宣教所の設置へとつながった。また1897（明治30）年には山名分教会（現在の山名大教会）の諸井国三郎会長自ら率先して組織的な台湾布教を展開し、台中、台北、台南の各地に拠点を設置した。この布教は、同じ系統の加藤さんが設立した嘉義東門宣教所をはじめ、嘉義宣教所、打狗宣教所の設置を促した。このほか、南海系統が力を合わせて、台州宣教所、新竹宣教所を設立した。さらに、天理教婦人会が1929（昭和4）年に台湾布教を計画し、1934（昭和9）年に臺北臺婦宣教所の設置につながった。このように、台湾が日本の統治下になってまもなく、単独布教や系統や婦人会をあげての組織的布教によって各地で布教が展開され、教会や宣教所の設置に至っ

たが、台湾での日本の統治が40年を迎えるころに伝道庁が設置されることとなった。

この理由について2代真柱は『台湾遊記』の中で次のように述べている。「最初の訪れの置土産は、台湾伝道の更生促進であった。天理教の海外布教史から云うとその第一頁を飾っている台湾伝道が、今日では最もと云うてよい程不振である。その更生に力をいたさんと設けたのが伝道庁であり、昨昭和11年春、早くも第一次の工を終った」（1～2頁）。2代真柱は、1934（昭和9）年の夏にはじめて台湾に訪れた際、台湾での布教活動が不振に陥っていることを目の当たりにした。そこで伝道庁を新しく設置することを決め、さらなる更生と促進を目指すことになったというのである。こうして、名実ともに伝道庁の建物が完成し、伝道庁を中心とした活動ができるようになった。しかし、1937（昭和12）年から終戦まではわずか8年間という短い期間となった。

これとは対照的に、朝鮮半島における天理教伝道は早くから伝道庁の機能を担った布教管理所を中心として展開された。朝鮮半島における天理教の布教は、1893（明治26）年頃、高知分教会（現在の高知大教会）の里見治太郎が釜山ではじめたのが端緒とされる。布教が活発になるにつれて信者の掌握や布教状況を把握する上から、1908（明治41）年9月24日に釜山に韓国布教管理所を設置し、初代管理者として松村吉太郎が就任した。

この管理所は1911（明治44）年6月に京城（現在のソウル）に移転建築され、名称も天理教朝鮮布教管理所に改められた。当初、布教師は日本人ばかりであったため、韓国人布教師養成が喫緊の課題となり、1916（大正5）年に管理所内に朝鮮教義講習所を開設した。開所当初は日本人入学者が多かったが、1929（昭和4）年に日本人の入学が許可されなくなって以来、名実ともに韓国人の天理教教師養成機関として定着し、布教管理者は2代目に上田民蔵、3代目に春野喜市がそれぞれ就任した。1926（大正15）年に4代目として澤田善次郎が就任し、この年に2代真柱がはじめて京城と釜山を巡教し、天理教青年会本部朝鮮出張所開所式にも臨席した。この後、5代目に土佐敏一、6代目に上原義彦、7代目に岩田長三郎が就任し、終戦を迎えることとなった。

戦前日本の植民地とされた台湾と朝鮮では、異なる動きがあった。早くから福岡教務支庁の所管とされた台湾では、布教の不振を更生促進するために伝道庁が開設された。一方、朝鮮では独自に布教管理所を設置し、現地人布教師養成に取り組んだ。この布教体制の違いは、戦前の内地からの眼差しの違いを反映し、戦後の状況にも大きな影響を与えるようになるのである。

[参考文献]

高野友治編（1997）『天理教史参考年表』養徳社。

天理大学おやさと研究所編（1989）『改訂 天理教事典 教会史篇』天理教道友社。